

日本語を母語とする幼児の 条件接続詞獲得過程について

Harry SOLVANG

1. はじめに

1. 1 第一言語習得理論の背景について

子どもの母国語習得(第一言語習得)と大人の外国語習得(第二言語習得)は様々な点で異なっていることは周知の事実であろう。例えば、子どもが母語習得の時に触れる情報は均一なものでもなく、順序づけられたものでもなく、教師によって教えられるものでもない。これに対して、大人の外国語習得は教室内で、教師によって、文法指導などに基づいて行われることは稀ではない。また、特別な障害がない限り、子どもは例外なく母国語習得に成功することに対して、大人の外国語習得が不完全で終わることは少なくない、などの相違点も挙げられる。

さて、子どもが驚くほどの速さで母語を存分にあやつることができるようになる事実を説明する理論としては、主に2つの対立するものにまとめることができる。まず最初に登場したのは、1960年代終盤まで言語習得観に大いに影響を及ぼした行動主義学習理論 (behaviourist learning theory) である。行動主義では、言語習得だけではなく、一般的に、人間の行動は刺激(stimulus)と反応(response)の連鎖によって形成されると考える。母語習得の場合には、要するに、子どもは大人のことばを聞き、それを模倣(imitation)し、強化(reinforcement)されることによって、徐々に身に付けていくというわけである。これに対して、Chomskyにより生み出された生得説 (innatism theory) が1960年代終盤から言語習得理論研究に革命的变化をもたらし、広く受け入れられるようになってきた。Chomskyは、行動主義学習理論のような考え方では様々な問題点があることを指摘し、そのアプローチを強く批判した。生得説の中心点とは、すべての人間には、自然言語に共通する規則や原理の体系からなる普遍文法 (universal grammar) を含んでいる言語習得措置が生得的に備わっているという主張である。つまり、子どもは生まれながらに、あらゆる言語に普遍的な文法をもっており、その生得的な知識と経験の相互作用によって言語習得を行っているという考え方である。

Chomsky が行動主義習得理論へ攻撃したことが引き金となり、1970年代には、子どもの発話に焦点を合わせた様々な研究が行われてきた。その主な結果として、子どもの発話の

多くはユニークで、大人の発話を直接コピーしたものではないということが明らかになったのである。故に、あらゆる種類の学習において、模倣と強化の重要性を強調した行動主義習得理論の妥当性が大きく損なわれることになった。今となっては、子どもには、母語が組み立てられている規則に関する仮説をたて、独自の構造を創造していく能力をもつため、積極的に自己の言語体系を操作しながら母語を身につけていくという考えは基本認識だろう。だが、例えば Lightbown, Spada (1999) が指摘しているように、子どもの発話を分析した際、その中には、比較的頻度高く相手の発話を模倣する場合もあるもので、行動主義習得理論を完全に拒絶する必要がないかもしれない。少なくとも早い段階での母語習得のある局面に対しては妥当なアプローチであろう。いずれにしても、子どもの言語発達は空中の中で起こるのではなく、周りの言語使用者と接触する必要があることは確かである。

1. 2 幼児の条件文習得研究

子どもの言語発達の中で、構造から考えれば類似した複文と比較して、条件文が遅い段階において現れてくるということがいくつかの先行研究により指摘された（例えば、Bowerman (1986)、Reilly (1986)）。英語、ドイツ語、ポーランド語、トルコ語、イタリア語を母語とする幼児を対象にした研究結果から言えるのは、通常、幼児がおよそ 2 才半から 3 才ぐらいまでの間、条件文が現れてくるということである。英語を例にすれば、if 条件文が幼児の発話に現れてきた時には、and、when、because、so など他の命題を複文に組み合わせるための接続詞が既に習得されているようである (Bowerman, p. 286)。これらに対して、赤塚 (1998) は、Akatsuka and Clancy (1993) の研究結果をもとに、日本と韓国の幼児たちが <世界の幼児たちより 1 年も早く、条件文で堂々と自己主張をするようになるのだ> (p. 68) と主張してきた。Akatsuka and Clancy (1993) は、それぞれ日本と韓国の 2 幼児ずつを対象にし、発せられた条件文の分析に基づき、習得過程を考察した。また、Clancy, Akatsuka and Strauss (1997) は、上述の幼児のデータに米国の 1 幼児のデータを加え、親たちが幼児に使った条件文を、大人が幼児の行為を好ましいと見るか、好ましくないと見るかという原理に従って分析した。言うまでもなく、Akatsuka and Clancy (1993)、Clancy, Akatsuka and Strauss (1997) の研究成果が幼児の条件文習得状況を明らかにするのに大いに貢献した。

1. 3 本稿の目標

本稿では、事例研究法に基づき、日本人の幼児の日本語獲得過程における条件接続詞の出現や使用に関する特徴を対象とし、家庭で行った自然な発話の中で、条件接続詞がどの時期に、どの程度、どの順序で現れてくるかなどについて検討する。Akatsuka 等の先行研究は意味論、語用論的観点から議論を展開したが、形態論的側面から検討した研究はこれ

まで見られない。本稿では、その点をふまえて、更に本研究の対象となった子どもの発話を分析する際、条件接続詞の初出現の時点から現在の3才3ヶ月までの条件接続詞を含んだ発話をもとに、それらに見られる形態論的な特徴について考察を行うことにした。

なお、本稿での具体的な対象としては、「ト・タラ・バ・ナラ」の四つの形式を含む発話を取り上げる。

3. 事例分析

本研究では、筆者の娘であるKちゃんの日記的な追跡方法によって、条件接続詞を含んだ238用例を収集した。

3.1 Kちゃんの言語バックグラウンド

Kちゃんは京都生まれ、現在までずっと近畿地方に住んでいる。母親は東京、父親はノルウェー出身であり、家では日本語標準語のみが使われている。しかしながら、6ヶ月になってからはKちゃんを平日には保育所に預けることになり、その先生方やクラスメートの殆どが関西方言を使っている事実があるため、関西方言からの影響がかなり大きいと推定される。他に言語的な刺激を与えるものとしては、子供向けのテレビ番組や御伽話のビデオ、または童話の本なども挙げられる。

3.2 条件接続詞の初出

Kちゃんが2才になる前までは、条件接続詞を含んだ発話記録はわずか2例となる。

<事例1>：(父親との会話)

父：Kちゃん、お尻をきれいにしましょうね。

K：ごはん食べたら... (1才11ヶ月)

<事例2>：これしたらあかんよ(1才11ヶ月)。

事例から分かるように、最初に現れてきた条件接続詞は「タラ」であった。次に、2才3ヶ月の時、「ト」が登場した。

<事例3>：尾関さん喉痛いの？山本先生行くとよくなるよ(2才3ヶ月)。

<事例4>：慶ちゃん(Kちゃんの妹)、そのままだと寒いよ(2才3ヶ月)。

更に、2才9ヶ月の時、「バ」の出現が記録された。

<事例5>：(父親との会話)

父： ストロー、見つからないんですよ。

K： ストロー？自分で探せばいい(2才9ヶ月)。

厳密に言えば、「バ」が初めて現れたのは2才7ヶ月の段階であった。しかしながら、その場合には、条件を提出するための「バ」とは異なり、「頂戴てば」という要求を強調するために用いられたので、用例数として数えてはいるものの、「バ」の初出として扱わないようにした。なお、「てば」の用法については、様々な意味領域にまたがるが、本研究の記録(5用例)に当てはまるのは、広辞苑の次の説明である：<助詞(トイエバの転)：体言や文の終りに付いて、呼びかけ・主張・依頼・要求などを強調する>(広辞苑：1837)。これはTohori(1998:136)が述べた“one possible explanation is that *ba* marks an emphatic topic”と一致している。

「ナラ」は形式として3才3ヶ月まで出現しなかったが、発話記録を詳しく調べると、その意味機能の一部に当たる「ダッタラ」の用例のいくつかが現れていたことが分かった。

<事例6>：(妹にあるものが落ちないように、別のところに移動したほうがいいのではないかという提案の場合)

ここだったら落ちないよ(2才8ヶ月)。

<事例7>：(元気でなさそうな妹の様子を見た場合)

もししんどいんだったら、熱を測ってお外行かない(2才8ヶ月)。

<事例8>：(保育所ゴッコをして、保育士になったつもりのKちゃんが園児役をしている父親の様子に不満を感じた場合)

静かにしていないんだったら読まない(3歳0ヶ月)。

形態論を主体とした枠組みから逸れるが、このケースのみ意味論的な立場から考察すると、これらの例が示すように、Kちゃんは相手の情報(発話ではなく、相手やものの様子)を認識し、それらの様子から解釈した状況を真であると前件に仮定し、後件には自分の意志、判断、相手への働きかけなどを表わしている。同じような「ナラ」に関する用法は、先行文献によく記述されている(例えば、蓮沼・有田・前田(2001:48)、益岡(2000:166)などである)。

これらの調査から、条件接続詞の初出に関する順序をまとめると、「タラ」→「ト」→「バ」の順に並べることができる。

3. 3 初出後の条件接続詞の出現頻度

では、「タラ、ト、バ」の場合、初出後引き続き、月年齢が上がるとともに次々と現れてきた。先ず、その出現頻度を1ヶ月、更に条件接続詞ごとに分類すると、表1のようになる。

表1 条件接続詞の出現頻度を一ヶ月ごとに計算した場合

| 月年齢 | タラの用例数 | トの用例数 | バの用例数 |
|---------|--------|-------|-------|
| 2. 0ヶ月 | 1 | | |
| 2. 1ヶ月 | 3 | | |
| 2. 2ヶ月 | 4 | | |
| 2. 3ヶ月 | 2 | 2 | |
| 2. 4ヶ月 | 1 | | |
| 2. 5ヶ月 | 5 | 2 | |
| 2. 6ヶ月 | 10 | | |
| 2. 7ヶ月 | 8 | 1 | 1 |
| 2. 8ヶ月 | 20 | 2 | |
| 2. 9ヶ月 | 21 | 3 | 1 |
| 2. 10ヶ月 | 13 | 6 | 1 |
| 2. 11ヶ月 | 15 | 1 | 3 |
| 3. 0ヶ月 | 15 | 9 | 1 |
| 3. 1ヶ月 | 8 | 5 | |
| 3. 2ヶ月 | 27 | 6 | 3 |
| 3. 3ヶ月 | 31 | 6 | 1 |
| 合計 | 184 | 43 | 11 |

この表に基づき、用例の一般的な特徴を分析してみる。先ず、最初に目に付くのは、「タラ」が圧倒的に多く使われていて、全体の77%以上を占めているという点である。このことは、Kちゃんは早い段階から、居住地域からの言語的な影響をもとに「タラ」の汎用性をつかんだということを語っているのではないかと推察できる。備前(1993:158)などによると、近畿を中心に条件文で「タラ」が頻繁に用いられていることは方言研究者の間よく知られている事実であるので、その特徴がKちゃんの発話にも反映されていることはそんなに驚くことではない。

もう一つの特徴として、「タラ」や「バ」形を作る上では、形態に関する間違いは見当たらない。この点は、外国人の日本語学習者と大いに異なっている。その相違点に関する裏付けとして、例えば、市川(1997)があげられる。市川は、日本語を第二言語として学ぶ学

生を対象に、それらのあらゆる項目についての誤用分析を行い、その結果を「日本語誤用例文小辞典」にまとめたのである。「タラ」の誤用の一つとしては、<「タラ」形が正しく作れないというところにある。「買いたら」「聞いたら」「見たら」のような形を作ってしまう(1997:370)>とあげられている。また、「バ」の場合、この現象がもっと目立つようである。市川によると、「寒えば」、「分からなれば」「行ければ」「入れれば」、などのような形態上の誤用は、学習者のデータにしばしば見かけるものである(1997:374)。さて、日本語母語話者の幼児と大人の日本語学習者との上述の違いは、第一と第二言語習得の本質的な相違を示しているのではないかと推察される。すなわち、自然な場面を通じて母語を身に付けていくことに対して、学校で文法指導などを受けながら言語を学ぶこととの相違に相当する。興味深い問題ではあるものの、この点についての詳しい議論は本研究の範囲を超えるので、以降は触れないことにする。

3. 4 形態的な側面からの分析

次に、Kちゃんの月年齢を考慮しながら、それぞれ「タラ」、「ト」、「バ」に前接する要素の形態論的な特徴に焦点を合わせよう。

3. 4. 1 「タラ」

最初に現れたのは、事例1と2に示したような動詞に直接「タラ」が後続する場合であった。「タラ」の184用例を調べた結果、このような例は、全体の90%以上を占めていることが明らかになった。2才3ヶ月の段階になって、動詞の否定形が「タラ」に前接した用例が初めて現れた。

<事例9>：本読む。見えなかったらこっち座ってね(2才3ヶ月)。

しかし、その後記録された同様な例は以下の2つほどだけであった。

<事例10>：(父親との会話)

父：明日プールを作ろうか。

K：風邪引いていなかったらね(3才1ヶ月)。

<事例11>：慶ちゃん分からないんだったら、教えてあげる。慶ちゃん分らななかったらね(3才3ヶ月)。

2才8ヶ月の段階で、「タラ」が「名詞+だ」に後続した例が現れてきた。

<事例12(=事例6)>：ここだたら落ちないよ(2歳8ヶ月)。

更に、「タラ」が直接に形容詞に後続した場合だが、以下の2つの用例以外には記録されていない。

<事例 13>：喉と鼻と耳痛かったら山本先生に行こうね(2才11ヶ月)。

<事例 14>：明日熱なかったら、髪の毛洗いましょうね(3才0ヶ月)。

「タラ」に前接する形態とそれらの初出現時期を整理してみると、次のように示すことができる。

表2 「タラ」に前接する述語の形態論的な特徴と初出現時期

| 述語の種類 | 初出現時期 | |
|-------|--------|-------|
| | 基本形 | 否定形 |
| 動詞 | 1才11ヶ月 | 2才3ヶ月 |
| 形容詞 | 2才11ヶ月 | |
| 名詞+だ | 2才8ヶ月 | |
| 形容動詞 | | |

また、図1は「タラ」に前接する述語種類の用例全体(合計184用例)に対する割合を示したものである。括弧内の数値はその割合を%で表わしている。

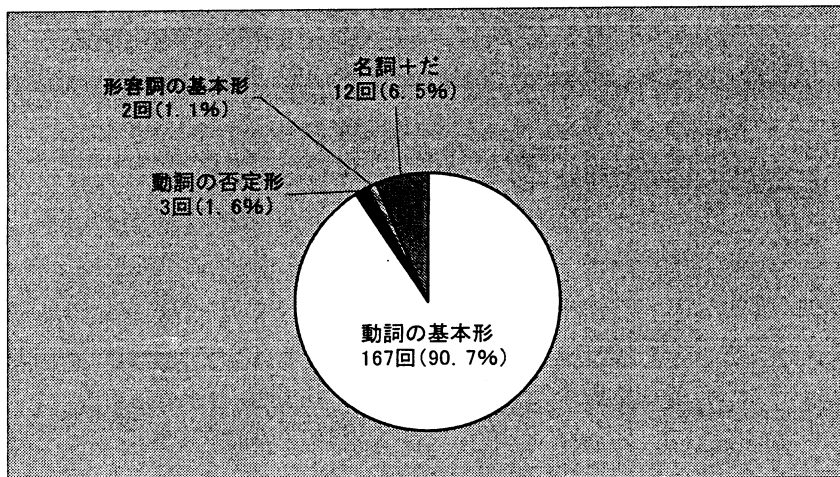


図1 述語類型と出現頻度の割合 「タラ」の場合

3. 4. 2 「ト」

既に考察したように、Kちゃんの発話に「ト」が初めて登場した時には、動詞の基本形に後続した。

<事例 14 (=事例 3)> : 尾関さん喉痛いの？山本先生行くとよくなるよ(2才3ヶ月)。
同時期の直後に、唯一の「名詞+だ」と「ト」の接続例が記録された。

<事例 15 (=事例 4)> : 慶ちゃん、そのままだと寒いよ(2才3ヶ月)。

また、2才9ヶ月の段階で、動詞の否定形と「ト」の組み合わせの便利さに目覚め、その時から頻繁に用いるようになった。代表的な例を以下に示す。

<事例 16> : お菓子食べたら、ちゃん歯磨きしないといけないね(2才9ヶ月)。

<事例 17> : 早く行かないと、遅刻しちゃうよ(2才10ヶ月)。

その3ヵ月後、「ト」が形容詞に後続した発話例が初めて記録された(事例 18)。しかし、その後に出現したのははわずかな1例(事例 19)だけであった。

<事例 18> : 私鉛筆がないと、困っちゃうわ(3才0ヶ月)。

<事例 19> : 目がないと見えないね(3才3ヶ月)。

表3は「ト」に前接する形態とそれらの初出現時期を示したものである。

| 述語の種類 | 初出現時期 | |
|-------|-------|-------|
| | 基本形 | 否定形 |
| 動詞 | 2才3ヶ月 | 2才9ヶ月 |
| 形容詞 | 3才0ヶ月 | |
| 名詞+だ | 2才3ヶ月 | |
| 形容動詞 | | |

最後に、「ト」に前接する述語類型と用例全体(合計 43 用例)の関係を「タラ」の場合と同様にまとめたものは図2である。

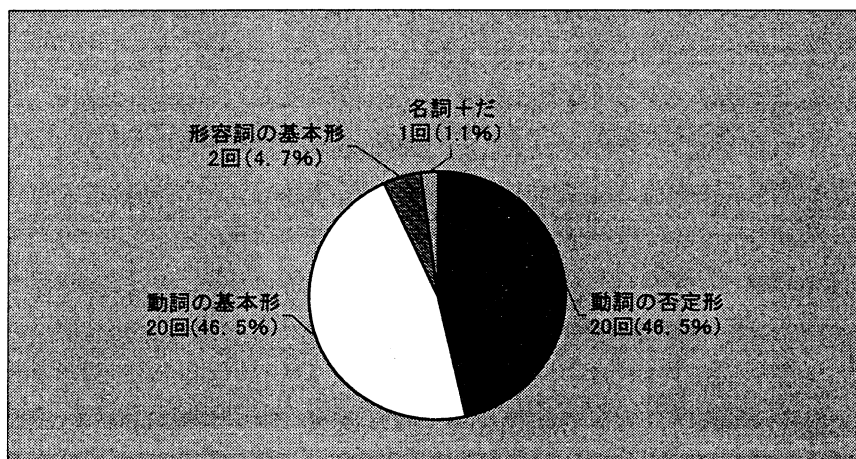


図2 述語類型と出現頻度の割合 「ト」の場合

3. 4. 3 「バ」

既に考察したように、「バ」を含む発話用例は11例であった。具体例として、

<事例20 (=事例5)> : (父親との会話)

父: ストロー、見つからないんですよ。

K: ストロー? 自分で探せばいい(2才9ヶ月)。

<事例21> : (保育所の話)

ききゅうぐみもあれば、ふうせんぐみもあれば... (2才11ヶ月)。

<事例22> : Kちゃんがやるってば (3才2ヶ月)。

が挙げられる。

「バ」に前接する要素を形態論的な特徴に基づいて分類する際、先ず「てば」用例を広辞苑の解説通りに、「といえバ」として考えることにした。それによって、全ての11用例の場合、「バ」が動詞の基本形に後続することが認められた。

4. まとめ

本稿では、日本人の幼児を対象に、事例研究法に基づき、母語発達過程に見られる条件接続詞に関する特徴について考察してきた。まず、条件接続詞の出現順序や使用程度、更に条件表現の形成過程における形態論的な発達について明らかにした。Akatsuka等の研究に代表される意味論、語用論的観点からの考察は、紙面の関係で回は触れることができなかったので、次の機会に試みることにする。

謝辞

本研究は通信・放送機構の研究委託「人間情報コミュニケーションの研究開発」により実施したものである。

参考文献

Akatsuka, N. and Clancy, P. (1993)

Effect and conditionals: Evidence from Japanese and Korean acquisition. In Japanese/Korean linguistics 2, p.176-192. Palo Alto:CSLI

Bowerman, M. (1986)

First steps in acquiring conditionals. In E. Traugott et al. (eds.) *On Conditionals*, pp.285-307. Cambridge: Cambridge University Press.

Lightbown, P.M, Spada, N. (1999) *How languages are learned* Oxford University Press

Ohori, T. (1998) Polysemy and Paradigmatic Change in the Japanese Conditional Marker

Ba. In T. Ohori (ed.) *Studies in Japanese Grammaticalization*

Kuroshio Publishers, Tokyo (pp. 135-163)

Reilly, S. J. (1986)

The acquisition of temporals and conditionals. In E. Traugott et al. (eds.)

On Conditionals, pp.309-331. Cambridge: Cambridge University Press.

赤塚紀子・坪本篤朗『モダリティと発話行為』研究社出版 1998

市川保子 (1997)『日本語誤用例文小辞典』凡人社

『広辞苑』(1998)第五版、岩波書店

蓮沼昭子・有田節子・前田直子 2001『条件表現』セルフマスターシリーズ7、

くろしお出版

備前徹(1993)「日本語教育における方言」『方言と日本語教育』国立国語研究所

益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版